

平成 21 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009
課題番号：18530642
研究課題名（和文） 近世日記史料に依る子育て文化の総合的研究
—時期・階層・地域性の解明に向けて
研究課題名（英文） A general study of child rearing culture from diaries in early modern
toward an investigation of periods, classes and regions
研究代表者
太田 素子（OHTA Motoko）
和光大学・現代人間学部・教授
研究者番号：80299867

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：近世日本、日記、子ども、子育て、親子関係、嬰兒殺し、家の継承、成育儀礼

1. 研究計画の概要

本研究の課題は、公刊されている近世日記を収集し、子育て意識と子育ての習俗が明らかになるような特徴を日記の中から抽出して、17～19世紀日本の子育て文化について、階層差、地域差を抽出しようとするものである。

これまで筆者は地域を限定して古文書の発掘整理をとまなうフィールド研究を行いつつ、日記の分析をおこなってきた。しかし上記のような目的から、今回は数多くの日記を分析する点に力点をおき、そのなかで4年間に7点前後の重点的な日記の理解のために必要な範囲でフィールド研究を行なおうと考えている。

2. 研究の進捗状況

全体として、やや遅れている。日記史料の収集そのものは予定通りに進んでいるが、スキャンした史料の解析やデータベース化の作業が想定以上に時間がかかる。それは、研究補助者に依存できる部分と、依存してはいけない部分の区別が難しく、全体として研究者本人の判断で抽出箇所を選択して行く以外に採る道はない、ということを再確認したためもある。これまでにスキャンした日記史料を土台にしながら、時間をかけて、近世日記の資料集成を作り上げてゆく。

また、そのような判断から重点日記のフィールド調査は4カ所で進めている。こちらはそれなりの進み方だが、予定に比べるとやや遅れている。

3. 現在までの達成度

上記のようなことから、計画の40%程度の達成状況である。ただ、基本となる史料そのものの収集は進んでいるので、研究の土台は形成できた。

4. 今後の研究の推進方策

収集した史料の一部分を、期限内に丁寧にまとめる。総合的な研究をめざした割には部分的なまとめになるが、歴史研究は時間がかかるもので、この機会に集めた史料を、将来も活かしてゆきたい。

農村の日記研究に加えて、地方都市の日記研究が進んだ。商人と農民の子育て意識について、比較史的な視野から分析が進められると良いと考えている。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①「近世自叙伝・回想記の中の親子関係と子育て文化」『湘北紀要』27号、2006年、37-52頁。査読有。近世日本人の自叙伝6点の中から、幼年期の回想を抜き出し、それらのエピソードに込められた子育て文化の性格を、同時代の日記の記録と比較しながら検討した。

②「江戸時代における人口制限と社会」『環』

2007年春号、特集<少子化再考>、藤原書店、2007年。査読無。角田藤左衛門日記の中の出生コントロールへの意識性について言及した。

③「家父長から「賢母」へ——近世武家社会における父と母の関係史」『歴史評論』第684号、2-15頁。<特集・子育ての歴史>、梓出版、2007年。査読有。江戸時代は全体として、子育ての責任を家父長である父親においた時代だが、次第に教育熱心で有能な母親が登場してくる様子を、伝承譚や日記から紹介した。

④「<子育て文化の比較史>によせて」『幼児教育史研究』創刊号。幼児教育史学会設立総会において、宮沢康人、小玉亮子らと行ったシンポジウムの原稿化。幼児教育史学会編集発行、2007年、査読有。日記研究の可能性に言及した。

⑤How Children Learned to Read and Write in Eighteenth- and Nineteenth-Century Japan, Richard Rubinger ed. ; Report of the Indiana Conference on Literacy in Japanese History , Translation Series No.3 (Summer 2008) pp.53-62/total page 73, peer-reviewed. Center for Research on Japanese Educational History Indiana University.

⑥「『継声館日記』にみる近世在郷町の識字状況」和光大学現代人間学部『現代人間学部紀要』第2号、会津高田の田中文庫に残る日記のなかの郷校の記録、135人の寺子たちの詳細な学習記録を整理紹介。在郷商人の文字学習への動機を探る、163頁-176頁。査読有。

〔学会発表〕(計5件)

①「回想の中の幼年期／自叙伝による教育史研究の可能性」幼児教育史学会 2006年12月5日、上智大学。

②「<子育ての歴史>研究の課題と方法をめぐって」日本教育史学会 2007年6月23日、謙堂文庫。

③‘How Children Learned to Read and Write in Eighteenth- and Nineteenth- Century Japan’The Indiana Conference on Literacy in Japanese History, 2007. 11. 3, Indiana University.

④ ‘The childhood in autobiographies written in Tokugawa era Japan ; Diversity and decline of human building in community. ’ The II International Conference on Community Psychology on Risbor, Portogy. 2007. 6. 3

⑤「人間形成の社会史におけるイエ」九州大学大学院人間環境学学群コロキウム『イエと人間形成』提案、2009. 2. 16, 九州大学。

〔図書〕(計2件)

①太田素子(単著)『子宝と子返し／近世農村の家族生活と子育て』藤原書店、2007年(第1部が日記研究49-160頁)。

②小山静子他と共編著『<育つ／学ぶ>の社会史、自叙伝から』藤原書店、2008年(太田執筆部分は第1章24-79頁、自叙伝と比較して、日記の中の回想記を史料として活用している。)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕